



どんぐり

No.66



竹伐採後の竹の運搬（赤穂市立尾崎小学校）

兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITSU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

Nature Education Center

本物に出会い、本物に学ぶ自然学校



兵庫県立南但馬自然学校

校長 山田卓三

本校は、多様な自然に恵まれ多くの体験が可能です。単に見たり聞いたりうわべだけの体験だけでなく、触・嗅・味の基本感覚を伴った原体験を期待しています。同時に自然の本質的な仕組みを学ぶことも大切です。この実体験と知(科学)の融合によって体験は経験となり、生きた知識として身に付きます。

本物に触れる意味

本物とはにせものでない実物のことです。しかし、いくら実物でもほんやり見ていたのでは本物に触れたことになりません。だまし絵として古くから知られている絵に「婦人と老婆」があります。これは見方によってどちらにも見ることが出来る絵です(図)。このように視覚だけで見ると、とんでもない誤解を生じます。



図「婦人と老婆」(W.E.Hill)

本物との出会い

南但馬自然学校の自然は豊かで、春から夏にかけて新緑やヤマザク

では、動物の剥製や植物の腊葉(さくよう)標本は本物でしょうか?生きた本物を知っていると本物に見えますが、知らない人にとっては本物という認識はありません。過去に飼育したり栽培したりするなどの直接的な体験があると剥製でも写真でもそれが生きてきます。本物に触れる実体験は生涯かされます。

自然の多様性の認識理解

話が聴くのも学びで、自然への興味がわきます。

自然学校は4泊5日以上なので、星や月、太陽などの天文気象、岩石、動物・植物・昆虫などの生物やキノコなどの菌類といった広い分野にわたる自然との出会いが可能です。自然は多様性のある存在で、動物と植物のようにある基準で一般化して分

けることができます。この分ける基準は科学の手法です。しかし、ある基準で分けてもその境界は連続しています。例えばミドリムシやボルボックスなどは葉緑素をもち、動物のように運動します。自然の観点として多様性、一般性、連続性の視点が必要です。また、人間は動物学的にはヒトで動物です。しかし、個性があり、抽象的な言葉や死など先を予想するなど特殊な能力を持っている特殊な存在です。自然科学の対象として、いのちとか魂など実体のないものは対象から除外されています。科学は万能ではありません。限界のある条件と定義の世界です。自然学校では本物の自然を通して自然科学的な認識だけでなく、自然への畏敬の念や人と人との関わりやこころなど感性的な側面も共に学びたいものです。



モリアオガエルの産卵

竹炭づくりチャレンジ



準備

竹を炭化炉の幅より、2~3cm短い長さに切り、6等分するように縦

ポイント

竹は、よく乾燥させた竹を使用します。よく乾燥させた竹を用いると着火、短縮できます。

★作り方★



1 炭化炉の設置

・平らに整地した地面に焚き口穴 (深さ7cm前後、幅15cm前後)を掘り、炭化炉を設置します。



2 炭材の詰め込み

・底に隙間材を敷き、炭材が壁に直接触れないように立て材を入れて、炭材を上フタ一杯まで詰めます。



3 着火①

・上フタをセットし、焚きつけ材 (新聞紙や小木) を空気が通るように置き



4 着火②

・着火後は、火を炉の中に送り込むように、うちわで勢いよく扇ぎます。



5 着火③

・うちわで扇がなくても煙道から煙が出続けるようになったら、ゆっくりと炭化させるために焚き口を少し狭くします。



6 ねらし・消火

・煙が青色から透明になったネルの底部に穴を空け、その後、炉の中に空気が入り、火を盛るなどして密閉し消



7 出炭

・炉が完全に冷めたら上フタを外し、炉本体を移動して出炭します。竹の体積は1/3程度になっています。



8 完成!

・竹炭のできあがりです。



◆竹炭をつかって

・完成した竹炭に火をついたら「パキッ」といういい音が炭を使って、バーベキューづくりができます。

注意:取り出した炭は、火が完全に消えていることを確認して収納し

野遊びで育む豊かなこころ



日本余暇文化振興会

研究員 松井 鴻

「自然のなかで遊ぶ」というと何とも心をわくわくさせてくれます。しかし、自然の中で遊ぶというのは大変なものなのです。かつて「大自然の中で遊ぼう」という趣旨のもと、子どもたちとキャンプを計画しました。きつと子どもたちは大自然の中で思う存分遊ぶものと期待していたのですが、それに反して実際はそうはいきませんでした。私たち指導者側の問題もあつたでしょうが、子どもたちの遊びは都市生活の延長線のゲームやボール遊びが主流で、十分「自然のなかで遊ぶ」ことはできませんでした。

しかし、よくよく考えてみますと当然の結果だと思つたことと、改めて私を含めて自然との関わり方や遊び方が、急激な社会変化の中で一瞬に忘れ去られてしまったという事実を知りました。「自然のなかで遊ぶ」という

伝承文化が一端途絶えてしまうと、遊びは単発的なものとなり、ダイナミックなものに発展しないのです。実は、自然の中のダイナミックな遊びを考へるとき、かつての日本人が遊んだ「野遊び」を再度、見直すことが重要だと思つていきます。

長澤武氏は、かつて中部地方以北の子どもたちがする草木遊びを調べ、「植物民俗」(法政大学出版社)の中で、「筆者が採取しただけでも、遊びに使用される植物は合計112種もあつた。内訳は草本が76種、木本が36種だった」と記しています。実に驚くべき数です。かつての子どもたちが野山を駆け回り、遊ぶ様子が目に浮かびます。

そこで、私が、野遊びの世界に引き込まれる要因となつた一つを紹介しつた。斎藤たま氏の著書「野にあそ

ぶ」(平凡社ライブラリー)のササ舟のページに出てくるササ舟の挿し絵は、私の知っているササ舟とは、どうも違うものがありました。何度も何度もつくってみるのですが、うまくできません。しまいには挿し絵を疑うままでになりましたが、ついに同じものをつくることができました。実に感動しました。「よくこんなものをつくつたものだ」と、子どもたちの想像力と感性に驚かされました。このササ舟は、ササという性質や構造の全体を利用してつくられており、これをつくつた子どもたちは、生活の中で意識するかしなにかに関わらず、植物の隅々まで理解していることと思ひます。

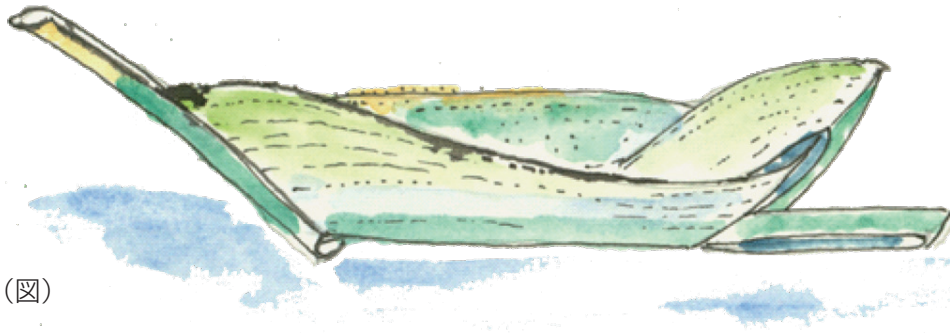
ササは、葉脈が縦に走っているのだから裂きやすく、茎につく葉柄を引っ張るように剥がすとU字型に剥がすことができます。そして何より、葉つ

ばの裏側に密生した短い毛があることで、水をはじいて浮かぶことができます。(図)のようにササの性質を十分に生かしてつくられたのがササ舟です。いかがですか、この造形美。かつて川を行き来した櫓のついた木造舟です。急流を下るササ舟から水溜まりにそつと浮かべるササ舟まで、子どもたちの手によって工夫が重ねられ、日本の各地でいろいろな形状の舟がつくられたのでしよう。



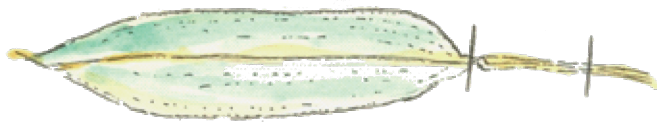
(5)どんぐり

日本の人々は、古来より四季に恵まれて多様な生態を育んできた風土や自然に生かされてきました。春のシロツメクサの花輪編み、夏のササ舟、秋のモミジでつくる人形づくり、

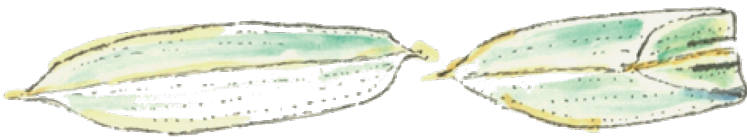


(図)

ササ舟を作ってみよう



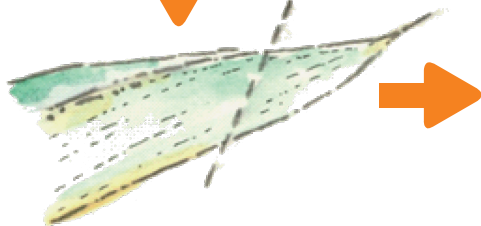
① 葉柄を切り取ります



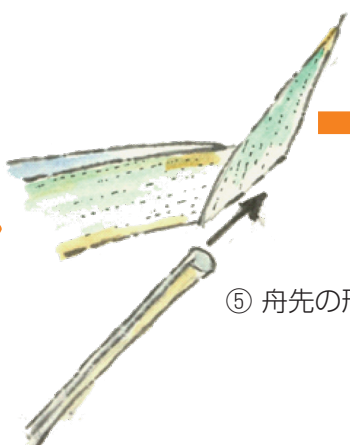
② 内側に折り、折り曲げた部分を3つにさきます



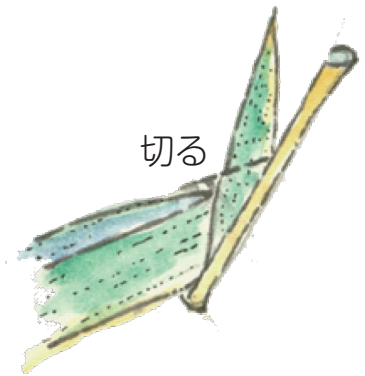
③ 左右を組み合わせます



④ 二つを重ね合わせます



⑤ 舟先の形になるように折り返します



切る

⑥ U字型になった葉柄を舟先に差し込み、とび出た葉先は切り取ります



冬のイヌマキの手裏剣遊びなど、野あそびの中から、野草のひんやりとした肌ざわりや香り、味覚、そして、野の花の素朴な美しさを身体いっばいに感じ取ったものです。
子どもたちが自然を知り、愛着を感じながら自然とのつき合い方を学ぶその第一歩は、草花や木の葉の遊びの中から生まれます。そして、自然を大切にする遊びを通して、豊かなところが養われるのだと思います。

また、子どもたちの感想に次のような感想もありました。
 「こんなことを思ってくれているんだったら、いつも口で言ってくれればいいのに・・・と思った」
 「親がどんなことを思っているのか、わかった」

そして、「3」にも関連するのですが、家の人普段口では素直に言えないことを手紙なら書くことができるように、子どもたちも家族から離れて3日目の自然学校の場であるからこそ、家の人に対して素直に感謝の気持ち等の様々な思いを書き表せるのではないのでしょうか。

2 自然学校3日目の夜は多くの子どもにとって心身ともに疲れがピークとなります。

その夜の手紙タイムで、家族からの手紙を読むことにより「家族が応援してくれているんだ。もう2日間、がんばろう!」という気持ちを高めることができます。そしてその後、家族への手紙の中で子どもたちの多くが、今の自分を振り返り、その思いを家族へ伝えることで、心の疲れを軽減することができると感じます。



〔子どもたちの感想より一部抜粋〕

- ・手紙をもらうまでは不安でしたが、手紙を読んで残りの日も頑張ろうと思いました。
- ・つかれがふっ飛びました。
- ・元気をもらった。がんばろうと思った。
- ・少し元気になりました。(ないちゃいました)

3 手紙タイムは、子どもたちは学校における国語科等での学習を生かし、家族へ手紙を書くことを通して「ことば」でより自分の思いを豊かに表現する活動として位置づけることができます。

今年度の「指導の重点」(発行:平成27年3月兵庫県教育委員会)にも「確かな学力」の育成の一つとして「ことばの力」の育成を挙げており、「ことば」を次のようにとらえています。

「ことば」は、自分の思いを表現することで、自分の心を伝え、相手の心を動かすなど、コミュニケーションや感性、情緒の基盤となるものである。

自分の思いを豊かに表現するためには、「自分の気持ちを表現したい!」という強い「きっかけ」が必要となります。そして、春風小学校の子どもたちにとっては、自然学校において家族から3日間も離れた状況で「家族からの手紙」を読むという「感動体験」が、それにあたるのかもしれない。

春風小学校の子どもたちの手紙は、自然学校の後に届きます。その手紙を家の人だけが子どものいない時、読んでもいいと思います。また、家の人と子どもと一緒に読んで子どもが「この時、こんな気持ちだったよ」と家族に自然学校の思い出を伝えるきっかけに使ってもいいと思います。

家の人から手紙を受け取った子どもたちの中には「その手紙は今でも自分の勉強機にしまっています」「手紙はしっかり宝物として持っています」という感想も多くありました。また保護者の感想の中にも「子どもがいないだけでなんだかさみしくなりました」「子どもに助けられていることが改めてわかりました」等、わが子のよさ、大切さを再認識した保護者も少なからずいたようです。

このように春風小学校の「手紙タイム」の取組からは、子どもが帰宅する前に届く「家族への手紙」とまた違った成果が見えてきます。みなさんの学校の自然学校でもぜひ参考にしてみてはいかがでしょうか。

(文責 山根 伸治)



特色ある取組 「手紙タイム～家族からの手紙・家族への手紙～」

西宮市立春風小学校の取組より

平成27年度は、4月27日(月)から12月4日(金)までの間に、本校で県下各地の55グループ76校(利用延べ人数：約2万7千人)が自然学校を実施します。

ここでは、1学期に行われた本校での自然学校の中から特色ある取組として、西宮市立春風小学校の活動を紹介します。

西宮市立春風小学校は、5年児童数161人(24班編成)で、平成27年5月18日(月)～22日(金)の期間、本校で自然学校を実施しました。そして、「ふれあい・きずなを深めよう ―自然・人とふれあって―」をテーマに、5日間の活動を計画しました。子どもたちは「ナイトハイク」「星空観察」「野外炊事」「隠れ家づくり」「竹箸づくり」等の活動に意欲的に取り組みました。

そして、その中でみなさんにぜひ紹介したい活動があります。それは、「手紙タイム」です。

「手紙タイム」と聞くと「なあんだ」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。他の活動名で言うなら、「家族への手紙」「はがきタイム」「はがき書き」と同じ活動に聞こえるからです。

多くの学校が取り組んでいる「家族への手紙」の活動は、概ね「子どもが1～2日目の夜、各自、自然学校における活動や生活を振り返り、家族に対して自分の思いを手紙やはがきに書き表す」というものです。

春風小学校の「手紙タイム」がその活動と大きく異なる点は、下記の二点です。

- 1 先生が事前に預かっていた家の人の書いた手紙を子どもたちに手渡す。そして、その手紙を子どもが読み、その返事も含めて子どもが家の人に手紙を書く。
- 2 自然学校3日目の夜に書く。

そして、「2」でピンときた方はこう思うでしょう。

「3日目の夜では遅すぎる。いくら4日目の早朝に投函しても、手紙が届くのは子どもたちが家に着いた後になってしまう。自然学校期間中に家の人に届かなければ手紙の意味がない」

確かにその通りです。しかしよく考えてみると、「3日目に家族の手紙を読んで、家族に手紙を書く」という「手紙タイム」の取組は、この5日間の自然学校で、以下のような点でとても意味のある活動であることに気付かされます。

- 1 **手紙タイムでは、家族と離れた生活を3日間行っていることで、家族や仲間のあいがたさを改めて実感するとともに、3日間という自然学校での豊富な体験を家族に伝えることができます。**

家族の手紙を読むことで、3日ぶりに家族の言葉、思いにふれる体験は、以下の感想のように多くの子どもたちにとってこの上ない「感動体験」となったようです。

【子どもたちの感想より一部抜粋】

- ・とっとうれしかった。夢中になって読んでしまった。
- ・久しぶりにお母さんの言葉が読めてうれしかった。
- ・帰ったら、お母さんのハンバーグが食べたいなあ、と思った。
- ・いつも以上にありがとうございました。
- ・お父さん、お母さんの大切さがわかった。
- ・読んだときにすごく悲しくなって泣きそうになった。でも、みんなが支えてくれたから、へっちゃらでした。
- ・感動した。「友達を大切にね」と書いてあった。だから、返事に「友達を大切にします」と書いた。
- ・とっとうれしかったです。少しお母さんに会いたいなあ、と思いましたが、みんながいたからホームシックにはならなかった。



エビフライ製造中



マツボックリをぐわえて、いきなり現れた夏毛の三ホシリス

「増田さん、リスって本当にいるんですか?」
 「おるおる、早起きして裏山に行ってみな、運がよかつたら会えるで」
 若手のスタッフとこんな会話もしばしば。

南但馬自然学校には、ニホシリス《以下、リスという。》

が棲んでいます。しかも、子どもたちが宿泊する生活棟のすぐ側までやつて来るのです。この日は、一番東にある生活棟、まつ館の近くでバツタリ出くわしました。

いったいどこで食べ物を探していたのでしょうか。口にマツボックリをぐわえて横枝を渡ってきたリスは、頭から背中にかけて水に濡れて毛の色がまだらになっています。

それに、顔の周りには、クモの糸やゴミまで付いているではありませんか。写真を撮る側からすれば、せめて顔くらいは、もう少しきれいにしてほしいものです。

そんな私の願いなど、どこ吹く風。体が安定する太めの枝に腰を下ろして、マツボックリを両前足で掴み食べ始めました。その早いこと早いこと、こちらがあ



リスの指は思いの外長く、爪は鋭い。口には松の実をぐわえている



この場所にリスが居たという証拠物件、山のエビフライはフィールドサインだ

ようなものを見られたことはありませんか。

もうお分かりだと思えますが、これはリスがマツボックリの中にある種、松の実を食べた後に残る芯で、形が似ていることから、私は「山のエビフライ」と呼んでいます。

本校でリスに会えるかどうかは、その時の運次第です。たとえリスに出会えなくても、このエビフライを調べること、リスがよく訪れる場所が分かりますし、「どんな風に食べたのかな?」なんて想像するだけでも楽しくなりますね。

リスは、松の実を全部取り出して食べ終え「エビフライ、一丁あがり!」とでも言わんばかりに、芯だけのマツボックリを無造作に地面へ落とし、今度は枝を伝って移動した先で、身繕いを始めました。

やはり、顔に付いたクモの糸やゴミが気持ち悪かったのでしょうか。両方の前足を頭の上で揃えて撫で下ろす動作を繰り返し、丹念にグルーミングを行います。



松の実を食べ終えたり。キョトンとした表情が笑いを誘う

たふたしてカメラのレンズを交換している間に、ほとんど食べてしまいました。後に残るは、ほぼ芯だけのマツボックリです。
 ところで、みなさんは登山やハイキングなどに出かけた時に、切り株や岩の上または地面で、上の写真の

その仕草は、まるでネコが顔を洗っているようで、大変微笑ましいものでした。
 その頃には、濡れていた体毛もすっかり乾いて準備完了。リスは、次なる食べ物を探すべく、枝から枝をすすると走り抜け、生活棟の裏山へ姿を消して行きました。



うつむいて目を閉じた表情が愛らしい

(文責 増田 克也)

研修会のお知らせ

○自然学校講座 (指導者入門) 【前期】

目的	自然学校の趣旨や指導者の役割を理解するとともに、野外体験活動等の実習を通して、指導者としての資質能力を高める。
期日	平成27年8月25日(火)～8月27日(木) 2泊3日
対象者	大学生、一般県民、県下の公立学校教員(高等学校初任者研修及び10年経験者研修として受講可)、その他自然学校に関心のある者
募集定員	30名
経費	7,000円(全日程参加の場合)
申込方法	「自然学校講座申込書」にて、直接本校に申し込む。(FAX、Eメール可)
受講形態	全日程の受講を原則とするが、1日又は講座単位の受講も可能とする。
研修内容	25日(火) 講話・実習「自然のお話と自然散策」 実習「ヒノキ伐採体験・クラフトの基礎基本」 演習「野外炊事指導の基礎基本Ⅰ」 演習「指導補助員の心得・先輩に学ぶ」
	26日(水) 講義・演習「自然学校・野外活動におけるリスクマネジメント」 実習「ロープワークを生かした遊具づくり体験」 実習「野外炊事指導の基礎基本Ⅱ」 実習「キャンプファイヤーの基礎基本」
	27日(木) 実習「野外炊事指導の基礎基本Ⅲ」 全体総括 振り返り